

彼女はそこに佇み、僕を見据えていた。

僕は彼女と距離を置いて対峙していた。僕たちは、はたから見ればあまりにも対照的に——あるいは非対称的に見えたであろう。彼女は落ち着き払っている。何処となく諦念と皮肉の入り混じった気配のする瞳で僕を見つめ、口元には、さあどんな滑稽な話を聞かせてくれるのか、とでも問わんばかりの不敵な微笑さえ浮かんでいる。一方僕の方はといえば、おどおどと当惑し、まるで情けない小動物のようである。あまりにも僕たちは不釣り合いであり、しかし逆にそれゆえまたある種奇妙な安定がそこには存在していた。

そこは、とある建造物の屋上だった。たいした有名でもない、芸術家気どりの建築家が設計した二流以下の建造物だった。屋上に柵は無い。彼女はあと二、三步足を踏み出すだけで空中に身を躍らせることができた。僕がここから一步でも彼女に近付けば、彼女はすこしの躊躇も見せずに飛び降りるだろう。停電は未だ続いている。どれほどの時間が経っただろうか。街灯さえも沈黙を守っている。照明は、雲間から洩れる月光のみだった。星は照明になりはしない。

屋上からは陰鬱な灰色のビル群——まるで墓石の群れ——しか見えなかった。電光という虚ろな飾りがはざされた都会は、ただの石の塊に過ぎない。その幽鬱たる墓場を背景に、彼女の姿はよく映えていた。瞳は海のように深く、美しかった。ともすれば彼女が生よりも死の側の存在であることはある意味で至極当然であるようにも思えた。

君は死を選ぶべきではない、と僕は言う。

何故？ と彼女は問う。

それは——と僕は答えに窮する。

あなたは明確な意思も無いのにわたしを止めようというの？ と彼女は言う。

それは何処か芝居がかっているように見えた。それは確かにその通りで、そもそも彼女の言葉からして何処か芝居めいていたし、またそのために、対する僕の言葉も否応なしに芝居がかってしまっていた。それに加えて、彼女を説得しようと僕が試みる度に容易に反駁されてしまう様も、いかなれば滑稽な道化のようだった。

僕が屋上の扉を開けたとき、彼女はそこにいた。彼女は足場の縁に立っていた。僕には

直感的に彼女が何をしようとしているのかわかった。僕が彼女に声をかけようとした瞬間、街の灯りは一瞬にして消えた。停電。あれは偶然だったのであろうか。だとすれば、あまりにも劇的すぎた。その瞬間に街の虚飾が剥ぎ取られ、あとには青白い闇だけが取り残されたのである。その暗転によって、遠景は消滅し、薄暗い舞台が突如として目の前に浮かびあがった。まるで世界が反転したかのようだった。無限に広がる宇宙が突如として裏返りでもしたみたいに、まるで、僕たち二人だけしかこの世にはいないかのように――あるいは、僕たち二人が宇宙のすべての中心にいるかのように思えた。

これがひとつの舞台であつたとすれば、主役は誰であつたのであろう。僕か、それとも彼女か。僕は奇妙な錯覚を抱いていた。世界が暗転した瞬間から、僕は僕でありながら僕ではなかった。僕はこの眼で彼女を見ながら、同時に何処か遠いところからこの状況を傍観していた。それはすべて見知らぬ国の風景のようで、起こることは何もかも他人事のよう思えた。ちやうど役者でありながら同時に観客であるかのような不可思議な感覚であつた。

雲が途切れ、青白い月光の照明が僕たちを照らす。

――何をするつもりなんだ、と僕は言った。

――わかっているでしょう、と彼女が言った。

彼女はあらゆる意味で僕を超越していた。もしかすると、死自体をも超越していたかもしれないと錯覚するほどに。そんな彼女を説得するというのは無謀な試みであつた。僕は彼女をどうにかして説得しようとしてきた。それに対して彼女は、わずかに二、三步こちらに近付いただけだった。――そう、そのつもりならわたしを説得して御覧なさいよ、と彼女は言った。彼女の雰囲気、僕がそれ以上彼女に近づくのを拒んでいた。断つておくが、決して彼女はそれを口に出したわけではない。あくまでも、威厳とでもいふべきか、彼女の「雰囲気」がそう言っていたのだ。だがそれは確信でもあつた。だから僕は扉の前から動かなかつた。

二人の距離はそれなりに離れていたが、それでも彼女の声はよく聞こえた。彼女の水のように澄んだ声は非常によく通つた。僕は、彼女の言葉に反論し続けている。だが、その反論が彼女の論理を崩すことは無い。そんなことを繰り返すうちに、まるで壁に向かつてひとりで庭球テニスでもしているような錯覚に陥る。

僕は薄々思い始めていた。僕の試みなどむなしい徒労に過ぎないのではないかと。何もかもただ彼女の死をほんの瞬間遅らせるだけに過ぎないのではないかと。

「でもね、主体性の無い意見——自らの解釈を通さない意見——というのは意味の無いものだよ。たとえば、自殺はいけないとあなたは言う。けれど、何故自殺がいけないのかという質問にあなたは答えられないのではなくて？　ここであなたが道徳について述べたすというのなら、あなたには用は無いわ。何故って、そんなことは誰でも知っていることですものね。いけないとわかっていてあえてするという人間にとっては、そんな題目には一片の価値も無い。わたしが聞きたいのは、そんないたるところに転がっている言葉より、真実あなたが生み出したあなた自身の言葉なの」

彼女の言葉はよく澄んだ水のように冷たい。それに対して、僕は不器用な弁解をするこ
としかできない。

「……人は、誰しも情報の海の中に生きている。情報というものは結局、過去の残響に過ぎない。過去の残響という海の中にいる限り、絶対に僕らは過去から逃れ出することは不可能なのだ。所詮僕らは、過去の残響の寄せ集めなのさ。思想というものは、幽霊が幽霊を再生産しているようなものだ。だから、真に自分の考えというものは存在しないし、それらはちようど主題と変奏のようなもので、見かけの多様性こそあるけれども、本質的な部分で変わりはないものだ。僕は自分自身の言葉など持ち得ないし、あるとしてもそれは——錯覚だ」

彼女は幾分か困ったような微笑を浮かべ、言った。でもね——
「わたしが言いたいのは、たとえば我々が過去の亡霊の寄せ集めに過ぎないとしても、それでも新たに生まれてくる考えというものは存在するのよ。あなたがいくらこの考えを否定しようとしても、それ自体は確実に存在している」

僕には不可解でならなかった。

「なら、君は君のいうところの新たに生まれてくる考えというものを必要としているというのか？　既にある考えでは君の死を止めることはできないと？」

あるいは、そうかもしれない。と彼女は言う。

「わたしが欲しているのは、いわば、わたしにとってまだ未発見の原理なのでしょうね。わたしが既に知っていることなど何の役にも立たない。わたしが生きていくことが可能になるような原理。わたしのところの中にはまだ生きたいという気持ちがあるから」

「君のこころが生きていることを欲しているのなら——ならば、何故わざわざ死を選ぶとうす
るんだ？　君が僕よりも、素晴らしい存在であることは間違いないんだ。だったら、だっ
たらどうして——」

「生きたいと願うことと、実際に生きることが可能であるということはまったく別次元の事柄だわ。飛びたいと願うこととそれが可能であることが別次元の事柄であるように」

「じゃあ君は生きたいと願っても生きられない状況にあるということなのか」
ゆっくりと確認するようにうなずく。

「ええ、そう言ってもおそらく過言ではないでしょうね」

「……病気？」

「いいえ、その意味ではわたしは『健康』そのものだわ、生憎なことにはね。でもわたしには、生きていく前提というものが本質的に欠けているから」

予想もしない言葉に、僕は間抜けたように繰り返す。

「生きていく前提？」

彼女はうなずく。そう、生きていく前提が欠けているのだ、と続ける。

「……それは、どういう意味なんだ？　それが現在生活していけない状況にある、ということの意味するのではないだろうことは僕にもわかる。だけれど、自活能力という意味以外に『生きていく前提』という言葉がいったい何を意味しえるというんだい」

彼女は首を横に振った。その表情は単にあきらめを意味していたのか、それともあるいは、何か別の——たとえばある種の隔絶を前にして不意に人が笑うときのような、名状しがたい乾いた感情であったのかはわからない。彼女はつぶやく。

「……既に持っている者は、それを持っているということにさえ気付かないし、持たざる者のことなどやはり想像しないものなのでしょうね」

彼女がいったい誰に向かって話しているのかわからなくなる。果たして彼女は僕ひとりに対して会話するというよりは、むしろ誰かこの場にはいない第三者——客観的に判断を下す傍観者に対して語りかけているようであった。

「ある能力を自然に身につけている者は、それを持っていない者のことなど想像もできないのかわ。その逆もまた然りだけれど。たとえば、どんな例が適当かしらね。そう、たとえば、眼」

「眼？」

「そう。眼は、わたしたちの持つ感覚器官の中で、もっとも発達したものであると言えるでしょうね。何故なら、視覚は五感の中ではもっとも遠くまで知覚することが可能なことから。聴覚も触覚も嗅覚も、視覚ほど遠くまで知覚することはできない。だから、我々は世界を認知するさいに、どうしても視覚に頼らざるをえない。」

では、それがどういうことを意味するかしら？ ……ひとつの答えは、視覚によらない世界というものを想像することができないということよ。

たとえば、生まれた頃から全盲の人間がいったいどのように世界を把握しているのか、ということをおわたしは想像しえない。それはとどのつまり聴覚、嗅覚、触覚、の組み合わせに他ならないのだろうけれど、それでもわたしはそのような世界を真の意味で想像しえない。何故なら、わたしにはそれらの感覚を用いて仮想の視覚を再構成することによってしか想像できないのだから。視覚に依存するわたしの考える世界は、どうしたつて視覚的世界にならざるをえないのよ。でも誰もそんなことに気付きもしない。それは既に与えられているものだから。それはまるで自明のごとく——実際はまったく自明でないにも関わらず——文字通り眼前に在るのだから、疑問を抱くはずも無い。

加えて、わたしたちは自分の認識しえない事柄というものを想像することもできない。普通わたしたちには見えないある波長の色が視える眼、というものを仮定してみましかか。

……果たしてその眼に視える世界をおわたしは想像しえるかしら？」

僕は考える。視えないものが視える世界とはどういうものだろう。

頭の中で理解すること——言葉の上で思い描くことはたやすい。だが、それがいったいどのようなものであるかは、想像上の動物について議論するようなもので皆目見当もつかなかった。いや、そもそもの話、自分に視えない色など想像しえるのだろうか。

「結局、そんな世界は——どうしたつて想像しがたいものなのよ。それはある意味不可逆な構造であつて、わたしたちは、減色した世界を想像することが可能だけれど、加色した世界というのはほとんど想像不可能。まあ、考えてみれば当たり前の話でしょうね、その加色された色からしてそもそも想像することができないのだから」

認識できない色が存在する、ということは別段不思議でもない話で、そこに矛盾は存在していない。彼女がいわんとしているのは、認識できないものは想像しえない、あるいは理解できない、というのではなく、単に実感しえない、ということなのか。

僕の頭の中を読んだかのように彼女は言った。

「理解しえないのではない。理解することは可能なの。でも、それを明瞭な感覚として掴むことは限りなく不可能に近い」

「つまり君は——、『生きていく前提』というものに関して理解はしているけれどそれを感覚として受け入れることが不可能だといいたいのか？」

御明察、と彼女は時代めかして言う。

「そう、理解できないのではないわ。理解はできるけれど、それはわたしの中には無い」
「そして、その『生きていく前提』を既に持つ者にとって、世界はいわば生的な、必然的に生を促すものにならざるをえない、と。そういうのかい」

答えないのは、間違っではないということだろう。

「ならば——再度問うけれど、その君のいう『生きていく前提』というものはいったい何なんだ？」

彼女はぽつりと言った。それは連続性だ、と。

「連続性？」

耳慣れぬ言葉、いや、むしろ使い慣れぬ——単語としては存在しても日常ではおそらくほとんど使わぬであろう単語。彼女はつぶやくように続ける。

「わたしが存在しているということ、あるいはわたしがわたしであるということの根拠は——、ただ連続性によってしか保証されないのよ。」

わたしが今生きているということの根拠は、単にその前の瞬間生きていたということでは無い。最初の瞬間、わたしとして生まれてしまったあとは、単に連続性によってしかわたしというものは保証されない。わたしがわたしであるという根拠は、それは単にわたしが昨日もわたしであったからに過ぎない。人の身体を構成する物質は約七年でそのすべてが入れ替わるといふけれど、そうやって変容してさえもなおそれがわたしであるということを支えるのは、まさに連続性に他ならない。

現出した存在は、ただその連続性によってしか存在を持続することはできない。何故なら存在は、究極的には何の理由も無く——在るのだから。何の理由も無く存在するならば、存在にそもそも必然性というものが無いのなら、その存在を維持するものは連続性以外に無い。そして、その連続性について維持しえなくなったとき——死なのかわ。

存在は生に始まり死に終わる。存在の連続性はいずれ破綻する。その瞬間、もはやわたしはわたしではなくなる。わたしは、存在しなくなり、あとにはかつてわたしであったものだけが残される。

それとも、こう解釈できるかもしれない。生命の本質というものが不断の変化にあるとすれば、わたしもまた変容し続ける。その変容の最前線にるのがわたしの。それはある意味で、脱皮を繰り返す蛇と抜け殻のようなもので——ただしその脱皮は無限小の時間に永続的に行われなければならないけれど——蛇が生きている間は、蛇と抜け殻は同じ世

界に同居している。しかし蛇が死んだ瞬間、そこにはもはや屍体と抜け殻しか残らない。言い換えれば、生とはわたしとわたしであったものが同じ世界に同時に存在している状態であり、死とはかつてわたしであったものしか世界に存在していない状態であると」

抜け殻というのは、単に客観的痕跡にとどまらず、主観的痕跡についてもいえるかもしれない、と彼女は付け加えた。

「じゃあ、『生きていく前提』が成立しているというのは——？」

「連続性を受け入れることができる状態であるといえるでしょうね」

すなわち、と続ける。

「あらゆる自分の抜け殻が、すべて自分であったと認めること。自分は昨日も自分であり、明日も自分であろうことを確信すること。そして、自分という存在の究極因は、自分がある瞬間に存在し始めたということ以外にはよっていないということを受け入れること」

しかし僕にはまだわからなかった。

「だとすると、その通りなのだろうさ。君の流儀でいえば、僕の認識する世界は連続的なのだろうか。しかし仮にそうだとして、いったい何処に問題があるというんだ？」

……確かに僕は無意識のうちに連続性を仮定して生きているのだろうか。昨日はこうだったから今日も同じだろう、という風に。そこに多少の差違があったとしても。だがそれは、世界というものの在り方が事実そうだからであるとはいえないのかい。いや、そもそも僕には連続性が存在していないというような状態がよくわからないんだが」

「わたしも、すべてが受け入れられないわけではないわ。けれどただ、ある一点の事実において前提が破綻している」

「ある一点？」

すうっと彼女は息を吸う音が聞こえた気がした。

「わたしがもはやわたしではないという事実において」

「君が、君でない？」

一種の謎かけなのだろうか。続く言葉が浮かんでこなかった。しかし彼女がふざけてるようにには見えない。彼女は真実を——少なくとも彼女自身の真実を——告げているように見えた。

「わたしは、過去のある一点から、わたしではなくなったの。理由はわからないけれど、わたしという人間はそこで完全に途切れてしまった。だからわたしがわたしであるという根拠は、もう何処にも無い。さっきの言葉で言えば——わたしは、かつてわたしであった

ものでしかなくなってしまった」

「……だが、君は今この瞬間生きているだろうか？」

哀れむように微笑む。

「本当のわたしはもう遙か遠く地平線の向こうへ行ってしまっただけ、ここに居るのはただの抜け殻だけ。それを生きているといえるかどうかは、また別の問題でしょうね」

それに、と続ける。

「わたしにはもう、生きるべき意志、というものが存在していない。あらゆる生命を維持する動機というものが存在しない。渇きも、空腹も、疲労も、わたしはもう感じない。それは、わたしがもう決定的にわたしではないから、物質としてのわたしの身体を維持することができないからでしょうね。魂の無い器がただ滅びていくように。」

わたしが生きたいと願うのは、夢が醒めないでほしいと願うようなものなのだわ。何故なら、わたしは既に死んでいるのだから、ここに居るわたしはまがいものに過ぎないのだからね。身体の死と、精神の死の合間の本来瞬間であるべき状態が、何の手違いか引き延ばされてしまったのね。

死者であるわたしはもはや世界に作用していない。世界がわたしに作用することも無い。わたしは世界に影響を与えることもできないし、世界から影響を受けることも無い。

これがどういふことかわかる？ あらゆる音はわたしの耳を素通りし、あらゆる映像はただ散漫に流れるに任せ、あらゆる触感は一瞬のうちに忘れ去られ、あらゆる芳香も風味も何ら痕跡をとどめることが無い。もはやわたしの意識は連続しておらず、ただ泡のようにその瞬間現れては弾けるのを繰り返しているに過ぎない。あらゆる記憶は、何の感興も生じることの無い、つまらない画像^{キヤラ}の羅列^リでしか無い。わたしにとって、わたしが不在の世界ではあらゆるものの意味が失われる——つまりはそういうことなのよ。

死ぬということは、ある意味では共感の対象から外れることであるといえるでしょうね。死者と生者の隔絶はそこにある。そう、人は死者になる以前の人間に対してしか共感しえない。何人も生きている限り死を経験しえないのだから。そしてそれは想像することさえできない。彼岸と此岸、とはよくいったものね。

^{ブラックホール}

暗黒星^{ブラックホール}というのを知っているでしょう？ あまりにも強い重力のために、光でさえも抜け出せない暗い星。そこでは、あらゆる事象は観測しえない。なぜならどんな情報もその外に出ることはないのだから。外にいる存在にとっては中を観測する手段がない。……事柄を観測しうる限界、という意味でしょうね。事象の地平線と呼ぶ人もあるわ。

そこで何が起こっているのかは、地平線のこちら側からは決してわからないのよ。死ぬということはそれに似ているかもしれない。人間には死の先のことを知りえない。いったいわたしがどうなったのかわたしにはわからないわ。それはもう想像の埒外にあることだものね。

けれどこちら側にいるわたしには、自分が自分でなくなるということはわかる。それは、世界から見放され、ありとあらゆる意味や区別というものが消失すること。存在というのが、在るという事実からも見放されること。それがどういうことであるか既にわたしは知っている。それは、人の住まぬ都市が朽ちていくに過ぎないということなのだ。あるいは、魂の無い肉体がただ崩壊を待っただけ——いわば無為に落ちていくだけの状態であるのだと。

終身刑というものがたとえようも無く非人間的なのは、肉体が維持される限り永遠に束縛から解放されないからでしょうね。死刑囚も、終身刑囚も、擬似的ではあるけれどすべての意味を剥奪されている。彼らはもはや死を待っただけの人間であって、彼らの生はもはや死の前の空白でしか無く、生の意味はほとんど失われている。彼らに違いがあるとすれば、それは絶望の性質によるものでしょう。

死刑囚は、自分が死ぬということを知っている点で希望が無い。どうなろうと、確実に刑は執行される。今日死ぬかもしれないし、明日死ぬかもしれない。いつ死ぬかわからない。何の前触れもなしに刑は執行されるかもしれない、だけどそれゆえ逆に死を覚悟することができる。反対に終身刑囚は、自分が死なないということを知っている点で希望が無い。無意味な空白は死ぬまで続く。昨日死ななかつたのであれば、今日もおそらく死なない。今日死ななかつたのであれば、おそらく明日も死なない。いつ死ぬかはわからない。けれど少なくともそれは近いうちではない。死はまるで逃げろといわんばかりにゆっくり——少なくとも死を覚悟させない速度で——と近付いてくる。しかし逃げ続ける限り刑は終わらない。自殺は無論許されていない。ただ無意味な生を浪費させ続ける罰なのだから

……けれど救いは、わたしは自殺することを禁じられていないということでしょうね」
地面に雨滴がしみ込むように、彼女の言葉は現れて消えた。

僕には何も言えなかつた。

「……………」

彼女は、ふと翳のある微笑い——哀しそうな微笑を見せた。それはこれまでの対話の中では一度も見せたことの無い彼女の弱々しさ、あるいは脆さのようにも見えた。

「やはり無駄だったようね……。所詮重力になど勝てるはずは無いものね」
また、つぶやくように言う。

「結局、ある程度の速度がついてしまえば、落下する物体を止めることなど不可能だったのよ。所詮河の流れを押しとどめることなどできないように」

僕は譚言めいたことしか口に出せなかった。

「まだ希望はある。まだ何か希望が……」

彼女は自嘲的に笑った。それは僕を、あるいは彼女自身を笑うというよりは、むしろ何一つ笑うべきことなど無いという事実に対して笑っているようでもあった。

「わかっているのでしょうか？ 本当は希望なんてもの、何処にも無いってことを。そうでなければ、あなたもわたしも、こんなところに来てやしない」

それに——、と続ける。

「知っていて？ 人間は絶望のために死ぬことはあっても、絶望のために破滅することは無いわ。破滅するのは希望の所為」

「詭弁だ」

「そんなことは無いわ。希望というのは甘い毒なのよ。たとえ余計に苦しむことになるうと、希望があれば人間はそこへついてゆく。それが破滅への道であっても——喜んでね」
やれやれ、というように彼女は首を振った。

「まるで誘蛾灯に群がる蛾のようだね。闇の中で儂い光を追うなんてね。でも、希望なんて星の輝きのようなものよ。いくら頑張ってもそれが手に入ることには無いし、もしかしたらそれはとっくの昔に消滅してしまった星の残光なのかもしれない」

空を見上げながら言う。

「——だとすれば、それは永久に手に届くことは無い光よね。要するに、もう何もかも手遅れなのだから。自分の力ではどうしようも無い」

月が再び、完全に翳った。

薄暗闇に眼が慣れるまで、すこし時間がかかる。彼女は、ゆっくりと二歩下がった。

「残念だね。一縷の望みに賭けてみたのにね。結局甘い希望的観測に過ぎなかった。

溺れる者は藁をも掴むとは言うけれど——最後の最後まで藁を掴めない人間だってやばりいるのじゃないか。わたしは既にそれが何の意味も無い藁であるということを知っている。だから藁を掴もうとすることさえできない。それが藁ではないということが無理に信じて掴む人間もいるかもしれないけれど、わたしにはそんな真似はできない。藁はどうし

たつて藁でしょう。無意味な藁以外の何物でもない。徒に挿んだところで、幻滅して余計に苦しむだけに違いないのに。

……でも、それでもまだ信じたい、まだ何かの可能性があると思いたい気持ちはあったのでしようよ。だって、あまりに寂しいでしょう？ 融ける一片の雪のように、跡形も無く、この世に何の痕跡も残さずに消えていくなんて。ただ、わたしの残響として消えていくなんて、ね。だから、あるいはあなたなら、と期待はしてみたけれど、結局あなたも死人——生ける死人なのよ。既に死んでしまった人間に自殺する人間を説得することなどできないわ。何故って、二人とももう死んでしまっているのだから。そういうことになってしまったのだもの。何もかもが最初から手遅れだったのよ。ただ落下していくだけ。そう、落下は止められない。だからこれも、ほんの気休めにしか過ぎなかった——」

彼女が寂しげに笑ったと思ったのは僕の錯覚かもしれない。そして次の瞬間、

「さよなら」

声と共に気配が消えた。ふわっと、闇に融け込むように彼女が消えた。

駆けよって、僕は、彼女が落ちていった闇を覗き込んだ。

漆黒の深淵が広がっている。その中には星が煌々と輝いて——星？

どうして星が見えるんだ？

眩暈を覚えると同時に、ふっと何かが元の場所に戻るような感覚がした。

甲高い金属音のような耳鳴り。

次の瞬間、重力が消失していることに気付いた。

天地が入れ替わったような感覚だった。

………

星が見える。身体は空を見上げているのだ。

流れる時間は至極ゆっくりだ。だが、有限の数が無限に分割できることを考えれば、それも何の不思議も無いことなのだろう。

そういえば、とぼんやり思い出す。

——屋上のドアを開けたとき。

独りだった。

屋上に他に誰一人いなかった。誰も止めてはくれなかったのだ。

逡巡していたのは、誰かが止めてくれるのを待っていたからかもしれない。

けれど誰も来なかった。誰も止めに来てはくれなかった。

だから——飛び降りた。

……だがあれは、あの会話は、いったい何だったのだろう。

何かの亡霊だったのか、それとも単なる幻想だったのか、それはわからない。

ひよっとすれば、あれは自身の影法師であったのかもしれない。

そうならば、やはり誰かに止めてほしかったのだろう。

結局のところ自分自身にその役割を負わせ、自分を説得しようとしていたのかもしれない。

い——だがどちらにせよそれはあまりにも遅すぎた。どうしようも無いほど手遅れだった。

……それも今では、単なる記憶に過ぎない。

けれど皮肉なことに、唯一明瞭に思い出せるのはあの会話だけだ。

それ以前の現実のことなど露ほどに思い出すこともできない。

記憶は、そこで途絶えでもしたかのようにそれ以上遡ることができない。

まるで最初からそれ以前のことなど存在していなかったとでもいうように。

これが、死ぬということだろうか。

自分という存在はもう世界に作用しもされもしない。

もう既に地平線を越えてしまったのかもしれない。

だとすれば、現実と幻想の区別などもはや何の意味も無いだろう。

自分が自分であることすらも、もはや意味が無い。

自分が自分であろうと無かろうと、ただ落ちていくだけなのだろうから。

あとは終わりに向かって空白を消費していくだけなのだから。

最後の瞬間が来れば、あらゆる区別は意味を失うだろう。

——認識が現実を追いつく。風の圧力を感じる。

落下の中では、自分の身体はもはや重荷ではない。

身体感覚は失われ、そこにはただ意識があるのみである。

いつまで落下し続けるのだろうか。

眼に視えぬ力——重力によって、落下は加速する。

有限の時間しか残されていないのならいずれ衝突するだろう。

けれど意識が無限に加速するならば、永遠に地面へは到達しない。

いずれにせよ空白がいくらあっても所詮空白であるということに過ぎない。

けれどそれだけの時間があれば夜空の星を数えきることぐらいなら可能かもしれない。

加速するほどに、意識は明瞭になる。

悲鳴は、出ない。それどころか、むしろ柔らかい安堵のようなものさえ感じている。
無限に広がる深淵——夜空を視ながら、光さえ無い奈落へと、落ちていく。

〈了〉